

じょう もん こう ばん き
縄文後晩期

～ムラとまつりの景色～

平成26年
1月13日
(月・祝)

会場：埼玉会館 小ホール



蓮田市久台遺跡出土
動物型土製品

主 催 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
共 催 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
公益財団法人かながわ考古学財団
後 援 埼玉県教育委員会・さいたま市教育委員会

『縄文後晩期～ムラとまつりの景色～』開催にあたり

東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、各都県で埋蔵文化財の調査・研究を行い、普及・啓発と活用を通して郷土文化の向上に寄与することを目的として設立された公益財団法人であります。また、併せて各都県における埋蔵文化財発掘調査の中核を担っている組織でもあります。

三法人では、平成20年度から普及連携事業として持ち回りで公開セミナーを開催しており、本年度で第6回目を迎えます。毎回多くの方々にご参加いただき、好評を博してまいりました。

今年度は埼玉県の担当で、縄文時代後期から晩期にかけての「ムラとまつり」をテーマに取り上げます。当時のムラはどのような姿だったのでしょうか、当時の人々はいったい何のために、どのようなまつりを行っていたのでしょうか。

本公開セミナーでは、こうした疑問について、蓄積された発掘調査や最新の研究成果をもとに皆様と一緒に考えてみたいと思います。

今回の企画が、郷土の歴史・文化に対する皆様のご理解をいっそう深めるとともに、私ども三法人を広く知っていただくきっかけとなれば幸いです。

本公開セミナー開催にあたり、後援をいただきました埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会をはじめ、ご指導・ご協力をいただきました関係機関・各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成26年1月

平成25年度開催法人

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 中 村 英 樹

平成25年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー

縄文後晩期～ムラとまつりの景色～

日 時 平成26年1月13日（月・祝） 10:00 から

場 所 埼玉会館小ホール さいたま市浦和区高砂3-1-4

主 催 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

共 催 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
公益財団法人かながわ考古学財団

後 援 埼玉県教育委員会

さいたま市教育委員会

開催日程

10:00～10:10 開会・挨拶

10:10～10:15 趣旨説明

基調報告・記念講演

10:15～11:00 基調報告1「石を使ったムラの景観」

公益財団法人かながわ考古学財団 小川岳人

10:00～11:45 基調報告2「環状盛土が現われるまで」

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 渡辺清志

11:45～13:00 昼休憩

13:00～13:30 基調報告3「さいたま市氷川神社遺跡の調査成果」

さいたま市遺跡調査会 柳田博之

13:30～14:15 基調報告4「ムラと貝塚とまつり」

公益財団法人東京都スポーツ文化事業団

東京都埋蔵文化財センター 西澤 明

14:15～15:15 記念講演「縄文後晩期の時代像と地域社会」

明治大学文学部 阿部芳郎

15:15～15:20 休憩

シンポジウム「縄文後晩期～ムラとまつりの景色～」

15:20～16:00 シンポジウム

16:05 閉会

目次

開催の趣旨	1
基調報告 1 「石を使ったムラの景観」	
公益財団法人かながわ考古学財団 小川岳人	2
基調報告 2 「環状盛土が現われるまで」	
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 渡辺清志	7
基調報告 3 「氷川神社遺跡の調査成果」	
さいたま市遺跡調査会 柳田博之	12
基調報告 4 「ムラと貝塚とまつり」	
公益財団法人東京都スポーツ文化事業団	
東京都埋蔵文化財センター 西澤 明	17
記念講演 「縄文後晩期の時代像と地域社会」	
明治大学文学部教授 阿部芳郎	22

開催の趣旨

新聞やテレビなどでは、連日のように発掘調査による新発見が報道されています。その報道に接するたび、心踊らされる方は多いでしょう。また、遺跡見学会に足を運ばれ、発掘調査の成果を直に目にする事で、当時の人々の生活に思いを廻らされた方もいらっしゃると思います。

そのような皆様に、更なる興味・関心を持っていただこうと、東京都・神奈川県・埼玉県の埋蔵文化財関係財団では、公開セミナーを平成20年度から開催しています。第6回目となる今回は、縄文時代後晩期のムラとまつりをテーマといたしました。

縄文後晩期以前は、ムラをドーナツ状に形づくる大規模な環状集落が各地に営まれ、住居の数は数百軒を数えることも稀ではありませんでした。恐らく、人々がムラで共同生活を営むなかで、様々なまつりが行われていたことは間違いないでしょう。ところが、中期の終り頃になると、大規模な環状集落は終焉を迎え、小規模なムラに分散するようになります。まつりも大規模なムラの時とは異なったものへと変わっていきました。

三法人が活動の場とする関東地方は、地形的にみても決して一様ではありません。神奈川県から東京都・埼玉県の西北部には、丘陵や山地が平野部を囲むように存在しています。後期の頃になる

とこのような地にムラを営んだ人々は、石を使った「敷石住居」と呼ばれる家をはじめ、「配石遺構」と呼ばれる様々な施設をつくるようになりました。

一方、比較的平坦な台地が広がる東京都や埼玉県南西部から東部、特に東部の地域では後期から晩期にかけて「環状盛土」と呼ばれる土をドーナツ状に盛り上げた大規模な遺構が築かれていきました。また、東京湾に接する地域では、「環状貝塚」と呼ばれる大規模な貝塚を形成していました。これらの遺跡からは、住居や墓など様々な遺構とともに、まつりに使われたと考えられる遺物がたくさん見つかっています。

このような巨大な構造物をつくるためには、多くの人々が共同でその作業にあたったことは想像に難くありません。

当時のムラはどのような姿であったのか。どのような人々が暮らしていたのか。いったい何のためにまつりを行っていたのか。謎は次々と浮かんでいきます。

今回の公開セミナーでは、三法人が発掘調査によって得られた成果をもとに、そのような縄文後晩期の謎を皆様とともに解いてまいりたいと思います。

基調報告 1

石を使ったムラの景観

公益財団法人かながわ考古学財団 小 川 岳 人

はじめに

今から 3500 ～ 4500 年前（縄文時代中期末～後期）に、竪穴住居の床に石を敷いた住居が作られました。他の時代には見られない特異な形態から「敷石住居^{しきいしじゅうきょ}」と呼ばれます。ここでは敷石住居を中心として、石を大量に使ったムラの姿について考えていきたいと思います。

1. 敷石住居

第 1 図は神奈川県伊勢原市子易・大坪遺跡^{こやす おおつぼ}で発見された縄文時代後期初頭の敷石住居です（三瓶・大塚 2013）。竪穴住居の床面全体に石が敷かれていることがわかります。住居中央に見える四角い囲いは火を焚いた炉。住居縁辺の石が抜けている箇所からは柱を立てた穴が発見されています。写真の左側に細長く突き出た部分が出入り口になります。（註 1）

敷石住居の復元

第 2 図では敷石住居の復元を試みてみました。モデルは子易・大坪遺跡の敷石住居です。地面を掘って床をつくり、柱を立てて屋根を架ける構造は他の時代の竪穴住居と変わりません。柱は壁際に建てられ、おそらくは壁と一体化していたと見られます。

他の時代の竪穴住居と大きく異なるのは床面に石が敷き詰められること、また大きく張り出した出入り口の部分です。

縄文時代中期末から後期中葉くらいの関東地方では、こうした住居が 1 ～ 数軒でムラ（集落）を構成していたと思われます（第 3 図）

特殊な住居か？ 普通の住居か？

敷石住居は一見その特異な姿から、宗教的な行為を行う場所であるとか、ムラの指導者のイエで

あるかのようなイメージを持たれがちですが、この時代の極々一般的な住居であることが明らかにされています（山本 1976）。

木を伐採する石斧と土掘り具くらいしか道具の無い縄文時代において、竪穴住居を作るには相当な労力が必要であったと思われます。敷石住居では、通常の竪穴住居と同様に地面を掘って、柱を立て、屋根を架けるという手間に加え、たくさんの石を運んできて床に敷くという膨大な手間と労力がかかることになります。一般的な住居であるとするれば、敷石住居をつくるのにあえて大変な労力が費やされた理由とは何だったのでしょうか。

2. 敷石住居の分布と展開

敷石住居は中期の終わり頃に出現し、後期の前葉～中葉にかけてさかんに作られました。その分布は石材が豊富な関東山地寄りの丘陵地帯や中部甲信地方を中心として、一部は北陸から東北地方に及びます。

敷石住居が作られた中期の末から後期中葉までとは、気候が冷涼化し縄文人をめぐる資源環境が極めて厳しくなった時代と認識されています。縄文時代中期末～後期初頭には、中期に数多く形成された環状を呈する大きな集落遺跡は失われ、住居が 1 ～ 数軒しかない小規模遺跡が散在するような状況となります。後期前葉には集落遺跡や住居跡の数には回復傾向がうかがえますが、中期の隆盛時のそれに及ぶものではありませんでした。また縄文時代後期は注口土器といった特殊な器形の土器が出現したり、後期から晩期にかけて土偶・土版・石棒・石剣といった呪術的（マジカル）な道具が著しく増加する傾向にあります。敷石住居の出現と展開も、時間的に前後しながらもこれら

と軌を一にする現象と捉えられることから、悪化する環境の中で、その不安を解消するために行われる呪術や信仰の表現であったとの解釈が行われています。

3. 敷石住居をめぐるマツリ

ここからは少し違った方向から敷石住居を眺めてみたいと思います。

敷石住居はそのほとんどが、非常に丁寧に石が敷かれています。ただ床に平らになるよう石を置けばよいというものではないらしく、石は大きさや位置が丁寧に吟味され、非常にバランス良く置かれています。中には現代の我々が見ても感嘆するようなものもあり、明らかに視覚的な効果を狙って敷かれています。あるいは住居の住人にとって、見事な敷石は自慢であったのかもしれませんが。

また、住居内に敷かれた石は、住居を作るたびにその都度集落へ運び込まれているように思われます。敷石が部分的に抜かれて、再利用されたと思われる例も少なからずありますが、敷かれた石が全部引き抜かれて使われたと思われる例は確認できませんでした。材料となる石を河原など石材の供給地から集落内に運び込むのは容易なことではありません。敷石住居には一人で持ち運べる程度の石も使用されますが、時に十 kg から数十 kg を越える石が使用されます。敷石に適した石を選択する必要もあり、石を敷くことだけが目的であれば、集落内に前からあった住居跡の石を再利用したほうがはるかに効率的なはずですが、そうしたことは行われていないのです。

遠方から運ばれる石

あわせて注意されるのは、かなり遠方から「特別な石」が運び込まれる例が多数あるということです。神奈川県伊勢原市や厚木市周辺で発見される敷石住居では真鶴半島周辺で採れる根府川石^{ねふかわいし}という石材が使われることがあります。前述の子

易・大坪遺跡は伊勢原市の丘陵地帯にある遺跡ですが、やはり根府川石を使用した敷石住居が発見されています。

また、埼玉県では荒川上流部に産地がある結晶片岩^{けっしょうへんがん}や緑泥片岩^{りよくでいへんがん}・紅簾片岩^{こうれんへんがん}が遠方に運ばれることが知られています。さいたま市の大木戸^{おおきど}遺跡では長さ 1.3 m 重さ 71kg もある紅簾片岩が敷かれ（西井・鈴木 2008）、同じく川越市下広谷^{うしはら}の牛原遺跡の 4 号住居跡では総計 472kg もの結晶片岩・緑泥片岩が敷かれていました（黒坂 2008）。どちらの例も大きな石が時には海を越え、十～数十 km も運ばれていることになります（第 4 図）。

根府川石や結晶片岩・緑泥片岩などは、ともに板状に割れる性質があり、敷石住居の床に敷くのに適しているのですが、特に根府川石などは遺跡周辺の石材と合わせて部分的に使われることも多く、必ずしもこれらの石材を使用しなければならない機能的な必然性は見つかりません。形状の持つ機能性から求められたとするよりも、「特別な石」として運ばれたことに意味があると考えべきなのでしょう。どちらも現在は玄関の敷居や庭の飛び石などに使われる石です。視覚的あるいは審美的な意味もあったかもしれません。

ムラのマツリをめぐる

遺跡の外から大量に持ち込まれる石、あるいはさらに遠方からはるばる運び込まれる特別な石には、敷石住居の構築にあたって膨大な労力・人手の存在を見ることができます。これは 1～数軒と考えられる当時のムラの居住者で対応できるものではなく、当然相当数のムラにまたがった協力が必要です。あるいは敷石住居の構築そのものが、多くの人々を集めるデモンストレーションや人々が集まって大騒ぎするマツリ的な性格を持っていたと考えることはできないでしょうか？

縄文時代中期末に敷石住居の出現と、大規模な環状集落の消滅が重なることは前述した通りで

す。中央の広場を取り囲むように長期にわたって営々と住居が作られ、居住が連続した環状集落は儀礼やマツリを中心であったと想定されます。その消滅とあわせて出現した敷石住居は、それまで環状集落が果たしてきた人を集めて集団内外の社会的紐帯を取り結ぶといった機能を、違う形で担っていったと考えられます。膨大な人手が必要とされ多くの人々が集まる敷石住居の構築が、そうした機能を果たした可能性を考えてもよいと思います。

石を運ぶ民族誌

多くの人々を集めて石を運び記念物（モニュメント）を構築する民族誌の事例は「くんこうさいえん勲功祭宴」などと呼ばれ、広くアジア・オセアニア各地で報告されています。こうした儀礼では大きな規模の祭宴が催され、集まった人々が主催者のために石を切り出し、運ぶなどして大きな記念物を作ります（山下 1975・1994）

こうした民族誌の事例を考古学的な現象にそのまま当て嵌めて、説明に代える手法は厳に慎まなければならないませんが、少なくとも、敷石住居をめぐるのは、その構築に大勢の人手が必要であり、敷石住居を建てることを契機に、複数のムラあるいは地域にまたがった人々の参集が想定されること、時に遠方からの大きな石材を搬入するといったデモンストレーション的な行為が加わること、構築された敷石に見られた時の視覚的な効果が期待されているといったことは考古学からも指摘できます。

資源環境や社会環境との関わり

敷石住居の構築が多くの人々が一箇所に参集する機会となり、また集団内外の社会的紐帯を取り結ぶものであったという考えは、縄文時代中期末以降環境が悪化するなかで、敷石住居が不安を解消するために行われる呪術や信仰の表現であったという従来からの解釈と対立するものではありません。敷石住居はこの時代に資源環境や社会環境

が大きく変わる中で、社会的な不安や緊張を解消する役割をはたしたと考えるのです。

4. 敷石住居と配石

後期中葉になると、住居内部への敷石行為は低調なものとなります。一方で外側に張り出した住居出入口部分への敷石は維持されるほか、住居の外縁部（竪穴住居の土を掘り上げて土堤になっていると思われる部分）に膨大な石が配されることがあり、これを「しゅうていれき周堤礫」と呼びます。多くの周堤礫は崩れた状態で発見されますが、まれに低い石積み状になっているのが発見されることもあり、おそらくは土留めや住居外観の視覚的な効果をねらって設置されたものと考えられます（第5図）。また住居本体の構造とは直接係らない規模の大きな配石や、石を配したお墓「はいせきぼ配石墓」を設ける例もあります。こうした「配石」が繰り返されると、ムラ（集落）全体がまるで石に覆われたような状況となります。

後期中葉以降、敷石住居は急速に消滅します。敷石住居が盛んにつくられた関東山地寄りの丘陵・台地上の遺跡が急減しているのが直接的な理由でしょうが、敷石住居の果たした機能が、他のものに置き換わったと考えられます。

それでも後期の末から晩期の初めごろ、神奈川県しみずてんのうさん清水天王山式土器の遺跡ではなおも石を使った住居や墓、配石などがつくられ、石を使ったムラの伝統が維持されるようです。

（註1）細長く伸びた出入口を持つその平面形態が、柄を持った鏡に似ていることから「柄鏡形住居」とも呼ばれますが、「柄鏡形住居」には敷石の認められないものもあります。ここではあえて「敷石」に注目し、敷石住居のみを扱うことにします。



第1図 神奈川県伊勢原市 子易・大坪遺跡 J 4号敷石住居跡



第2図 敷石住居跡の復元



第3図 敷石住居のムラ
上のような敷石住居が1～数軒で
ムラ（集落）を構成していたと思
われる。



遠くから運ばれる石
敷石住居に使用される石は数十 kg から数百 kg に及ぶ。そのほとんどは遺跡周辺で得られる石が使用されるが、秩父山地の片岩類や真鶴半島の根府川石のように、時に 10km 以上を運ばれる石材がある。大宮台地上の大木戸遺跡では長さ 1.3m 重さ 76kg の紅簾片岩が敷かれていた。

第4図 遠くから運ばれる特別な石

後期中葉以降、竪穴住居内部への敷石は低調になるが、住居入り口部分の敷石が行われるほか、竪穴住居外縁部に膨大な石が配されることがある。こうした配石が繰り返された遺跡は、まるで石に覆われたような状況となる。



第5図 石で覆われた住居

基調報告 2

環状盛土が現われるまで

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 渡 辺 清 志

今回与えられたテーマは、埼玉県内における縄文時代後期・晩期の集落景観（ムラの景色）についてです。では、当該地域において「後晩期的な集落景観」とは何でしょう？

それはしばしば「祭祀・呪術の時代」と言われ、土偶・環状列石など性格不明の遺物・遺構によって象徴されるものです。

今回のセミナーのサブタイトルは「ムラとまつの景色」です。多種多様な遺物についてはひとまず措いて、以下ではさまざまな遺構を中心に「後晩期的な」集落景観の成り立ちとその意味するものについて考えてみたいと思います。

大規模環状集落の解体と小規模拡散

後晩期について語る前に、後晩期集落の「後晩期らしさ」を際立たせる中期後半までの集落景観についてみていきましょう。

縄文時代中期、西部山間部を除く県内各地の台地上には、中央広場を持ち、累積数十軒～百軒を超える竪穴住居跡で構成される大規模な環状集落が展開します。

飯能市八王子遺跡（勝坂Ⅰ～加曾利Ⅱ）、日高市宿東遺跡（加曾利Ⅱ～Ⅳ）、毛呂山町新田東遺跡（勝坂Ⅱ～加曾利Ⅲ）、本庄市古井戸／将監塚遺跡（勝坂Ⅲ～加曾利Ⅲ）、嵐山町行司免遺跡（勝坂Ⅰ～加曾利Ⅲ）、伊奈町原遺跡（勝坂Ⅱ～加曾利Ⅳ）、桶川市諏訪野遺跡（勝坂Ⅲ～加曾利Ⅰ）等がその代表です。

大半は勝坂Ⅲ式期に規模をいちじるしく拡大させる集落で、加曾利Ⅱ～Ⅲ式期までに最盛期を迎えます。しかし、柄鏡形（敷石）住居跡の出現する加曾利Ⅳ式期には著しく衰退してしまい、称名寺式段階以降まで集落を継続させる例はほとんどみられません。

後続する称名寺式期の集落は、それまで大集落が営まれた台地の周辺に散らばり、一集落あたりの軒数をはるかに減らして細々と営まれるようになります。

中期の環状集落に隣接して「それなり」の規模の後期初頭集落が存在する入間市坂東山遺跡^{ばんどうやま}でも、そのムラの形や竪穴住居跡の分布は中期と後期で明らかに変化してしまいます。

集落立地の多様化と水辺への進出

縄文人の水辺利用については、中期より以前にも多くの証拠が残されています。

北本市デーノタメ遺跡では、勝坂式期に始まる木の実塚から多数の漆製品や漆塗り土器が出土しています。さいたま市寿能遺跡^{じゅのう}では、泥炭層の中から中期後葉から後期中葉にかけての杭列や木道が発見されました。一方、低地ではありませんが、秩父市姥原遺跡^{うばはら}からは段丘崖から流れ出た湧水を石列でいくつかの小区画に区切った中期後葉の水場が発見されています。

これらは、当時のひとびとが水辺を取り込んでさまざまな生業活動を行っていたことを示す痕跡といえます。しかし、当時のムラそのものが、低湿地を望む水辺空間へと降りていくのは、やはり後期初頭～前葉を待たねばなりません。

寄居町樋^ひの下遺跡は荒川を望む段丘礫層上に営まれた称名寺式から曾谷・安行Ⅰ式期にかけての集落ですが、次第に集落全体がより低位の空間に降りて行く様子を見ることができます。白岡市清左衛門遺跡^{せいざえもん}は大日沼^{だいにちぬま}と呼ばれた谷地形に面した後晩期の集落で、やはり後期前葉から晩期に向かって住居の低地進出と水場の利用が活発化していく様子が窺えます。注意したいのは、特に大宮台地北西部^{かんとうぞうばんちうんどう}では関東造盆地運動の影響で台地の

沈降が進んだために、本来は台地地形のなかにあった集落景観を実態以上に低湿地的なそれに見せかけていることです。伊奈町戸崎前遺跡・鴻巣市中三谷遺跡は大宮台地東部の埋没台地上に存在する堀之内式期を中心とした集落です。

とはいえ、後期以降の集落の占地が中期以前のそれよりも相対的に低位部に存在することは事実です。こうした縄文人の低地進出の一因として、後期以降の気候寒冷化が挙げられます。寒冷化による海水面の低下は、台地部では谷の開析を、低地部では土砂の再堆積による自然堤防や砂州の生成、扇状地形の発達を促したと言われています。

深谷市堀東遺跡では、中峠～加曾利 E I 式期の包含層を厚さ 1 m にわたって覆うシルト（微細な砂）層の上面が後期の生活面となっていました。柄鏡形（敷石）住居跡

縄文時代後期初頭に現われる集落景観の変化のひとつに、柄鏡形（敷石）住居の出現が挙げられます。

柄鏡形（敷石）住居跡は、炉跡を中心とした円形の主体部（居住部）に、出入り口施設とされる長大な張り出しを伴う住居構造で、加曾利 E Ⅲ式新段階～Ⅳ式期に雑多な住居形態のひとつとして出現し、称名寺式期にはほぼ県内全域において盛行します。

敷石を持つか否かは石材供給源からの距離に大きく左右されますが、さいたま市大木戸遺跡第 5 - 3 号住居跡に敷かれていた重さ 71.7kg の板石は小川町・長瀨町・児玉町等に産する紅簾石片岩であり、最も近い供給源である小川町の槻川からでも約 30 km 離れていた例からすれば、石を敷く行為自体になんらかの象徴的な意味があったと考えざるを得ないでしょう。

張り出し部を持つ住居形態そのものは加曾利 B 式期まで存在するものの、敷石を伴うものとなるとほとんどが称名寺式期末までで、堀之内式期以降となると県内では小鹿野町塚越向山遺跡・皆

野町駒形遺跡・秩父市入波沢東・入波沢西遺跡等、秩父山地の山間部に限られています。

また、寄居町立原小路遺跡からは、石囲い炉を中心に部分的な敷石を持つ住居跡が検出されました。床面からは伏せ甕をはじめ数個体分の土器が出土していますが、それらはいずれも加曾利 E Ⅲ式でも古い特徴を持っています。本例は、県内で住居跡の床を面的に覆うタイプの敷石住居が出現するよりも 2 段階以上古いもので、時期的に断絶が認められます。

こうした分布のありかたは、荒川筋を通じた平野部との文化交流では説明しにくく、南西関東や群馬県西部・東信・山梨方面との、峠・尾根筋ルートによる直接的な交流の結果と考えた方が理解しやすいように思われます。

屋外配石

県内では、敷石住居以外の屋外配石についての調査例は多くありません。

深谷市桜ヶ丘遺跡の 3 m × 1.5 m 前後の長方形の敷石群は縄文時代後期とされていますが不明な点が多いようです。近隣地域の例に照らして屋外施設であることが確実なものは、やはり秩父山地の遺跡に限られています。

小鹿野町塚越向山遺跡では加曾利 E Ⅲ式を出土する環状列石が発見されています。列石内に住居跡や埋甕・土壇を取り込んでおり、群馬県西部の環状列石との共通性が窺われます。なお、同遺跡では加曾利 E Ⅳ～称名寺式期の小配石や堀之内 1 式期の弧状列石も検出されています。

堀之内～加曾利 B 1 式期に至って、皆野町駒形遺跡・大背戸遺跡・秩父市入波沢西遺跡等で石棺墓が出現し、また、柄鏡形敷石住居跡の左右に列石を伴う例が現われます。入波沢東遺跡では堀之内 2 式末～加曾利 B 1 式期の柄鏡形敷石住居の張り出し部を中心に面的な配石の展開がみられ、その一部に堀之内 1 式の配石墓を取り込んでいます。この配石墓の内部からは、甕被り葬を思わせ

る伏せ甕が出土しています。

晩期安行Ⅲb～Ⅲc式期には小鹿野町^{しもだいら}下平遺跡に環状や方形の配石群が出現し、これに重複して環状列石が構築されます。配石の下面からは土壙群が検出されています。

土壙群上面を覆う環状列石の構築は、東京都^{たばた}田端遺跡などの南関東の在り方を連想させます。一方、土壙のなかには多遺体埋葬を思わせる大型のものが含まれることは、茅野^{かやの}遺跡や千網谷^{ちあみがいと}遺跡など群馬県域との関連性も窺われます。

掘立柱建物跡

一般に平地式の建物跡と考えられるピット群は各時代に存在しますが、その規模や配置は竪穴住居跡のそれと大きな違いがなく、削平された竪穴住居跡の痕跡とみられるものも少なくありません。

これとは明らかに異なる、定型化した建物は加曾利E式期に出現します。日高市宿東遺跡では巨大な4本柱穴の建物跡が発見されました。位置関係や重複関係等から加曾利EⅢ式期のものと考えられますが、同時期の典型的な竪穴住居跡の柱穴と比較するとその規模と配置の違いは歴然としています。同様の掘立柱建物跡は菖蒲町^{かみのき}神ノ木2遺跡や毛呂山町新田東遺跡でも検出されており、今後も事例が増えて行く可能性があります。

後期に入ると、堀之内式期の和光市丸山台遺跡で検出されたような亀甲型柱穴配置を持った建物跡群が出現します。その柱穴配置はもちろんのこと、少数の竪穴住居跡に多数の掘立柱建物が伴う在り方には、神奈川県^{かみかくしまるやま}神隠丸山遺跡等の南西関東の遺跡との関連性が窺われます。

亀甲型掘立柱建物跡の類例は、加曾利B式期の大宮台地西部のさいたま市大木戸遺跡にも現われますが、住居跡と建物跡の軒数はほぼ同数になっています。南西関東の遺跡とは、掘立柱建物の用途が違っていたことが考えられ、在地の居住形態のなかに取り込まれた一種の「在地化」が想定さ

れます。

後期の亀甲型掘立柱建物跡の柱穴は、規模の上では竪穴住居跡のものと大差なく、かつて竪穴住居跡の残骸として処理されたものも多かったものと考えられますが。しかしその一方で、縄文時代にも平地式の建物が存在することが知られるようになってからも、埼玉県内ではあまり掘立柱建物跡の報告例が増えていないのもまた事実でなのです。

鴻巣市^{あかぎ}赤城遺跡や桶川市^{うしろや}後谷遺跡、蓮田市^{うたや}雅楽谷遺跡等では、後期から晩期にかけて大量の遺物が廃棄され盛土の形成が行われるにも関わらず、後期のある時期になると竪穴住居の数が著しく減少してしまいます。一方、赤城遺跡で晩期の柱穴列群として報告されているもののなかには明らかに長方形に並ぶ柱穴群が含まれています。

特定の地域や時期に、あるいはある集落の特性として、こうした平地式建物がひんぱんに造られるケースがあったのかもしれませんが。縄文時代後晩期の集落調査を行う際は、今後も一定の注意を払っていく必要があるでしょう。

袋状土壙

台地部で縄文後期の集落を調査していて、人の背丈ほどの深さを持った大型の土壙を発見することは珍しくありません。裾広がりのいわゆる「フラスコピット」や、中段の張った袋状のものなど形態は様々ですが、底面の中央付近に多く柱穴状の小ピットを伴う点は共通しています。

蓮田市雅楽谷遺跡、さいたま市大木戸遺跡、白岡市清左衛門遺跡等、大宮台地の遺跡に多くみられますが、和光市丸山台遺跡や川越市^{かみぐみ}上組遺跡等、武蔵野台地側でも発見されています。

時期的には称名寺式期のある時点で出現し、堀之内式期から加曾利B式の前半期に最盛期を迎えて、その数は同時期の竪穴住居跡の軒数をはるかに凌駕することも少なくありません。その後、曾谷～安行1式期には急速に数を減らしてゆき、晩

期では川口市石神貝塚^{いしがみ}など一部の遺跡を除いてほとんどみられなくなります。

これらの大型土壙からは、貝塚地帯ではしばしば人骨が出土することが知られており、丸山台遺跡では土壌分析の結果から遺体が存在した可能性が指摘されています。

袋状土壙が最終的に埋葬施設としてその役割を終えたケースも少なからずあったようですが、群馬県白倉下原遺跡^{しらくらしもはら}や東京都多摩ニュータウン No.194 遺跡等で、炭化した堅果類の出土例があることから、本来の目的としては収穫した堅果類を一時保存するための施設であったと考えられます。また、集落内での分布状況から、竪穴住居＝世帯ごとに管理されていた可能性があります。

水場遺構

これまでに県内で発掘された木造の水場遺構のうち、最も古いものはさいたま市南鴻沼遺跡^{みなみこうぬま}で発見された中期末～後期初頭のものです。杭と板材を組み合わせた構造で、「流れている水をせき止めていたものか、井戸状のものか」と推定されています。

鴻巣市赤城遺跡では中央窪地の一角に第1号竪穴状遺構と呼ばれる施設が検出されています。これは長軸4m、短軸3m、深さ0.5m、内部に杭を伴った木組みを持つ長方形の掘り込みで、隣接する溝によって調査区外に存在する河道から水を引き込む構造になっていました。内部からは少量ながらトチ・クルミ等の木の実が出土しました。時期は安行1式期に比定されています。

桶川市後谷遺跡では、集落から旧河道に至る斜面に複数の区画に仕切られた木造の水場が検出され、内部から曾谷～安行1式の土器が出土しました。斜面下方には、トチ・クルミの果皮を含む砂の層が積もっていたということです。

晩期では川口市赤山遺跡^{あかやま}、石神貝塚、吉見町三の耕地遺跡^{さんのこうち}、白岡市清左衛門遺跡等で同様の木造遺構群の発見が相次いでいます。埼玉県外でも

東京都下宅部遺跡^{しもやけべ}や千葉県道免き谷津遺跡^{どうめきやつ}、栃木県寺野東遺跡^{てらのひがし}等、枚挙に暇がありません。

これらの水場遺構は集落に隣接して、ほとんどの場合単体で検出されており、特定の世帯に属さない協働の場として管理されていたものと考えられます。

環状盛土の出現

窪地をとりまくようにして環状のマウンドが築かれる「環状盛土」は、埼玉県内でも近年報告が相次いでいます。過去の調査記録の中から「再発見」される例も少なくなく、県内における縄文後晩期の集落景観を特徴づける大きな要素のひとつといいいいでしょう。

県内における代表例としては、蓮田市雅楽谷遺跡^{きゅうだい}、同久台遺跡^{きゅうだい}、鴻巣市赤城遺跡、桶川市後谷遺跡^{ぼんぼおむろやま}、さいたま市馬場小室山遺跡^{ぼんがみ}、川口市石神貝塚、伊奈町本上遺跡^{ほんがみ}、加須市長竹遺跡^{ながたけ}等が挙げられます。これ以外に熊谷市諏訪木遺跡^{すわのき}、菖蒲町小林八束Ⅰ遺跡^{おばやしはっそく}等の環状にならないタイプ、蓮田市ささらⅡ遺跡、白岡市清左衛門遺跡等の谷地形を埋め立てるタイプまで含めると、同時期の一定規模の集落のほとんどが土地の造成を行っていた可能性があります。

盛土がつくられた期間については、集落全体を調査した例がほとんどないため一概には言えませんが、加曾利B式期に包含層の形成が始まっている例が多く、晩期に入ると関東ローム層の掘り下げを伴って本格化し、安行3c～d式期には終わっているようです。この点は、大宮台地岩槻・安行支台における環状貝塚の消長とも重なっています。さいたま市大木戸遺跡では、黒色土主体の分厚い遺物包含層が観察されました。これは集落自体が加曾利B式期に廃絶されたために、盛土の構築が本格化しなかった例と考えられます。

「中期的なもの」から「後晩期的なもの」へ

中期の終わりと時を同じくして劇的ともいえる衰退を示す大環状集落を、集落景観における埼玉

県域の「中期的なもの」と位置付けるならば、後期初頭～前葉に顕在化する集落の縮小分散化と低地進出、さらに屋内外の配石と大型貯蔵穴、あるいは亀甲型の掘立柱建物等が特徴づける集落景観はまぎれもなく「後期的なもの」といえましょう。但し、屋外配石については分布が西部の山地帯に限られるうえ、時期的にもきわめて散発的なので、既に述べた通り他地域からの直接的な影響が大きいものと考えられます。

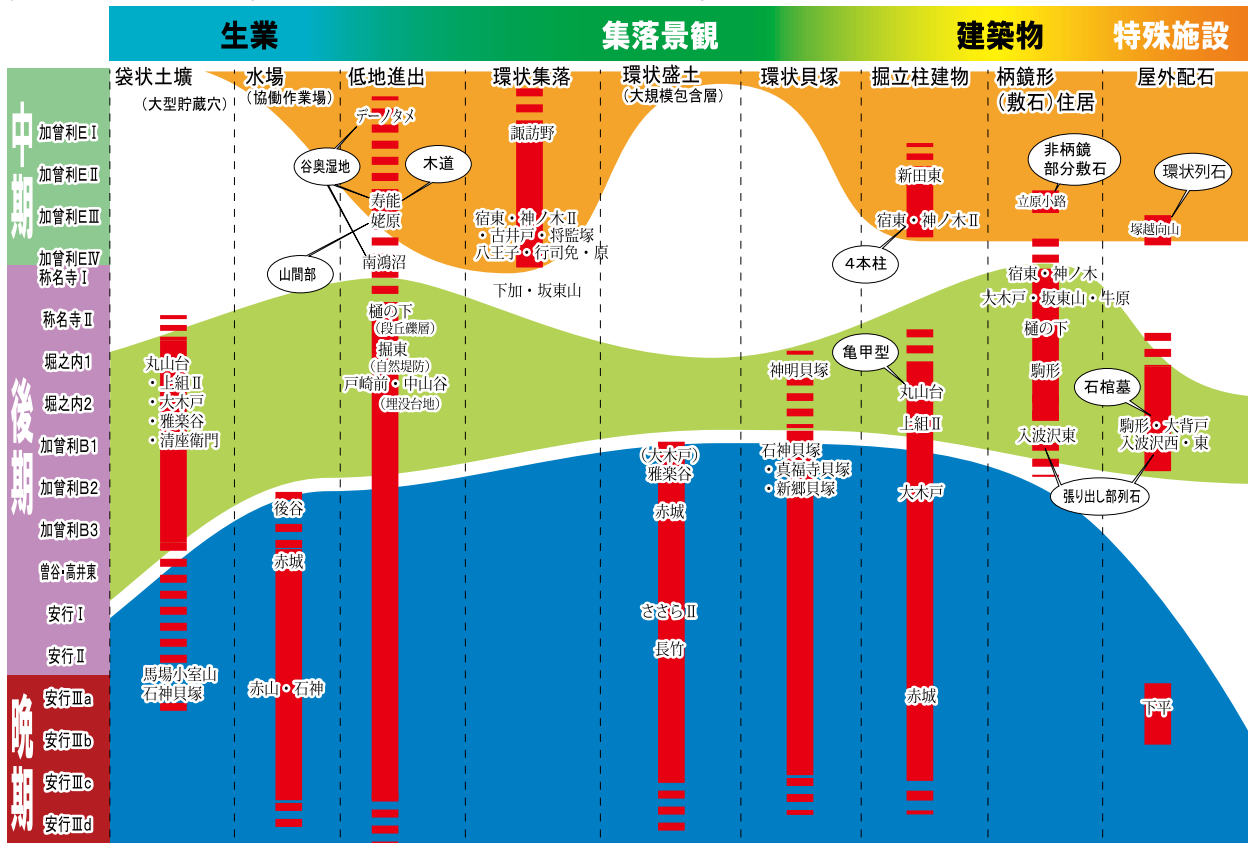
柄鏡形敷石住居に代表される屋内配石にしても、後期初頭～前葉段階では石材供給源の有無に左右されつつも南西関東並みの隆盛をみせますが、後期中葉に下る例はほとんど知られていません。

大型貯蔵穴は大部分の集落で後期後葉をまたずに姿を消してしまいます。亀甲型の掘立柱建物は後期前葉の時点で県南部に導入され、晩期まで存在することは確実ですが、その全体像はいまだ把握できていません。

これら後期初頭から前葉にかけて現われては消えていくさまざまな要素は、いわば「環状集落後」のあらたな社会を模索していく試行錯誤の過程を示すように見え、その最終的な着地点として環状盛土が出現するのではないのでしょうか。

最後に、これまで述べてきたことがらを、「中期的なもの」・「後期初頭～前葉的なもの」・「後期中葉～晩期的なもの」という視点で整理してみました（第1図）。

大型貯蔵穴群の衰退と水場遺構の出現は、堅果類の可食化を組織労働によって行うことで、採集した堅果を世帯ごとに一時保管する必要性がなくなったことを示す一連の出来事であり、「協働」というキーワードのもと表裏の関係にあるということが出来ます。当地域における縄文文化の最後の華である環状盛土（貝塚）の形成も、その延長線上に立ち上がるいわば「協働の社会」としての縄文集落の再編成の産物なのではないのでしょうか。



第1図

基調報告 3

さいたま市氷川神社遺跡の調査成果

さいたま市遺跡調査会 柳 田 博 之

はじめに

氷川神社遺跡は、古くから知られている遺跡で、明治 22 年に八木^{やぎ}三郎氏が『東京人類学会雑誌』に「雑報 埼玉県大宮公園より所出の土器」として安行式深鉢形注口土器のスケッチを紹介し、遺跡の状態を「土器塚」と報告しています（八木 1893）。その後大きな空白期を置いて、昭和 49 年に新井和之氏（新井 1974）、昭和 59 年に荏原淳氏（荏原 1984）により表採資料の紹介が行われています。そして、平成 19 年には鈴木加津子氏は、『氷川神社社叢調査報告』掲載の「氷川神社の地形図」と「社叢の地質柱状図」（大宮市教育委員会 1994）をもとに氷川神社遺跡がいわゆる塚状の盛り土遺構を伴う遺跡ではないかとの指摘（鈴木 2007）をしています。今回の調査は、鈴木氏の指摘を証明する大きな第一歩となりました。なお、鈴木氏の論文に対しては、新井和之氏の反対意見（新井 2008）があります。

今回の調査は神社建設事業に伴うもので、調査面積は 678 m²、調査期間は平成 24 年 4 月 9 日～11 月 6 日である。

遺跡の立地

氷川神社遺跡は、JR 大宮駅の北東約 1.3km に位置する武蔵一ノ宮氷川神社の境内及びその社叢を中心に立地しています。そこは東側の芝川の谷から約 700m 入り込んだ台地上で、その前面は袋状の谷になっており、全体に入り江のような地形を形成しています。このような地形はほぼ同時期^{ばんぽおむろやま まえくぼ}の馬場小室山遺跡や前窪遺跡でも見られ共通点があります。遺跡の範囲は神社本殿を含む 300 × 280m ほどで、標高は 12 ～ 17m です。東側約 1km の台地下には縄文時代後・晩期を中心と

^{じゅのうでいたんそう}する寿能泥炭層遺跡があります。

調査の概要

調査区は氷川神社本殿の東側隣接地で、その中は起伏に富んでおり、大小 2 か所の高く盛り上がった部分が存在しました。

発見遺構は縄文時代後・晩期の住居跡 16 基・土坑 53 基・溝状遺構 1 基である。出土遺物は土器・土製品・石器等が 30 ℓ 入り平ケース 68 箱分です。

調査区中央付近に存在する大きな盛り上がり部分は塚状を呈し、調査区外にも大きく広がり径 40 ～ 50m の規模です。この盛り上がり部分の調査は今回最も注目すべきもので、上層から下層まで住居跡 4 基・土坑 40 基が折り重なるように存在しました。上層から中層にかけて晩期初頭の住居跡があり、ローム土で固く埋め戻され、床面近くに本来の覆土である黒色土が土器・石器等と共に堆積していました。そして、盛り上がり部分中層には後期後葉の住居跡、下層には後期中葉の住居跡が存在しました。つまり、ほぼ同じ場所に 3 基の住居跡が累積していたことになり、古い住居跡を埋め戻し、その上に新たに住居を構築するという行動を繰り返した結果が塚状の盛り上がり部になったもので、そこがそのような高まりなることは意識していたものと思われます。そして、土坑は長楕円形を呈するものが多く、土製耳飾りの出土するものがあることから墓坑の可能性もあります。

この盛り上がり部分と神社本殿の間は、ローム面がわずかに本殿に向かって傾斜しており、発見した住居跡は多くが上層に黒色土が堆積する晩期中葉のものでした。これらの住居跡は下層の多量

のローム土とわずかな炭化粒子を含む黄色土中から遺物が出土することが特徴で、掘れるかどうかの判断が非常に困難でした。

おわりに

氷川神社遺跡には、神社本殿を取り囲むように盛り上がり部分が途切れながら馬蹄状に社叢内を

巡っており、推定径 170m です。新井氏が指摘する（新井 2008）ように神社内の改変工事も多く行われているらしいことを考慮するとすべてが縄文時代のものとはいえませんが、今回の調査によりそのいくつかは縄文時代後・晩期の盛り上がり部として間違いのないようです。



塚状盛り上がり部上層～中層の縄文時代晩期初頭の住居跡・土坑



塚状盛り上がり部中層の縄文時代後期後葉の住居跡



塚状盛り上がり部下層の縄文時代後期中葉の住居跡



縄文時代晩期中葉の住居跡群①



縄文時代晩期中葉の住居跡群②



深鉢形土器



鉢形土器



深鉢型土器



異形台付土器



土偶



土製耳飾り



石鏃

基調報告 4

ムラと貝塚とまつり

公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 西 澤 明

1. はじめに

縄文時代の貝塚を伴う遺跡では、遺跡の中に残された貝の影響で、多くの場合、人骨や動物骨が、一般の遺跡よりも良好な状態で見つかります。その結果、当時の葬墓制や食生活について、より詳細なデータを得ることが可能です。縄文ムラにおけるまつりを検討する際もその道具と思われる土偶や石棒等の他に人骨や動物骨が、大切な分析対象資料となります。

東京都の縄文時代後晩期の遺跡で貝塚を伴う遺跡は 29 あります。中でも、北区西ヶ原貝塚は、明治時代から知られている著名な貝塚で、発掘調査の成果も数多く積み重ねられてきています。本発表では、西ヶ原貝塚で発見された後期前葉から中葉にみられるまつりの痕跡を手掛かりに、他地域の様相もふまえながら、縄文ムラにおけるまつりを考えてみたいと思います。

2. 西ヶ原貝塚とまつり

遺跡の概要

遺物は、早期前半、前期前半、中期後半、後期、晩期前半のものが出土しており、断続的ではありますが、長期間にわたる縄文人の活動の跡を確認することができます。前期前半、中期後半から後期、晩期前半については、一定数の住居も発見されており、時期により規模は異なりますが、ムラがつくられていました。特に、後期前葉から中葉にかけてのムラでは、住居の他、墓や貯蔵穴などもつくられており、一定期間、継続的に縄文人たちの活動の場となっていたようです。

貝塚は、平面形が馬蹄形になっており、その広さは、東西約 150 m、南北約 180 m あります。縄文時代中期後半から晩期前半にかけて形成され

ており、西側では大規模な面貝層が見つかった一方、東側では、竪穴住居の跡地や土坑内に形成された貝層のみで、これらが累積した結果、平面的には弧状を呈しています。馬蹄形状に展開する貝塚の形成過程について、東西で、異なる様相をうかがうことができるようです。

西ヶ原貝塚にみるまつり

まつりの道具としては、土偶等が出土しており、土偶祭祀^{まいし}の存在等が予測されますが、ここでは、葬送の場や出土動物骨に見られる儀礼の様相を見てみましょう。

後期前葉から中葉にかけてのムラは、南側に開口する^{おぼ}溺れ谷を取り囲むように住居がつくられており、墓地は、そのムラの中の住居のまわりに隣接する場や住居の跡地という個別に場に認めることができます。墓地に葬られている人は、隣接する住居や住居跡地に関連する人々、すなわち、世帯等に関わる人々を想定でき、墓地における葬送での儀礼的な行為の存在を予測することができます。

また、後期中葉の墓坑の中には、一次埋葬を行った後、遺体を掘り起こしたと思われる例もあります。二次埋葬に関わる遺構が発見されていないため、慎重に検討する必要がありますが、再葬^{さいそう}行為を伴う葬送儀礼が存在していた可能性があり

ます。次に、動物骨の出土状況から儀礼的行為を想定できる例を紹介します。122 号土坑 (写真 8・9) の覆土上層には、後期前葉に形成された貝層が堆積しています。その貝層の直下からは、イノシシの下顎が伏せた状態で発見されており、貝層中からは、イヌの^{かがく}下顎骨・^{とう}上腕骨・^{しゃつ}橈骨・^{かん}尺骨・^{だいたい}寛骨・^{けい}大腿骨・^{けい}脛骨等がまとまって出土しています。

23・29・43号貝層(写真6)は、後期中葉から後葉にかけて、住居の跡地に形成されたものですが、後期中葉に形成された貝層の直下から、面的にイノシシやシカの骨が出土しています。これらの骨は、貝層中からはほとんど認められないので、貝層形成前に遺棄されたものと思われます。このような遺棄がどのような背景の元で行われたかは、今後の検討を要しますが、同一貝層の後期後葉に形成された部分の貝層の直下からは、男性器を模した骨角製品(素材は鹿角)が意図的に配置されたような状態で出土しており(写真7)、これについては、貝層形成前の儀礼的な行為が背景になっていた可能性があります。

3. 墓地とまつり

関東地方南西部の中後期では、中央部の広場をとり囲んでムラが形成される環状集落が数多く発見されています。その広場には、墓地が構築されることが多く、ムラにおける共有の場でもあることから、集落構成員全体に関わるまつりの場であったと推測されます。一方、西ヶ原貝塚や東関東地方では、ムラの中でも住居のまとまり等に対応した個別の場に墓地が形成されており、このような墓地には集落構成員全体に関わるような役割は少なかったと思われます。ただ、祖先祭祀等がこの場で行われていた可能性はあり、その場合、集落構成員の一部に関わる祖先を対象としていたと思われます。

葬送に伴って、儀礼的要素を認めることが可能な事例として、再葬行為をあげることができるでしょう。このような葬送行為については、西ヶ原貝塚でもその存在の可能性を指摘しましたが、千葉県域では、多遺体を埋葬する再葬墓が、発見されていますので、これらを通して、後期における葬送儀礼の一端を紹介します。

千葉縣市川市の^{ごんげんぼら}権現原貝塚では、後期以降の住居が中央広場をとり囲むようにつくられており、

再葬墓は、その中央広場から発見されています。直径約1.1m、確認面からの深さは約40cmの円形の土坑で、土坑内には18体分の人骨が集積されていました。18体の人骨は、歯の形態的特徴から二つの遺伝的なつながりを持つグループに分けられることが指摘されており、出自の異なる二つのグループが同一墓坑に再葬されたものと推定されています。再葬された人骨の初葬地としては、中央広場にある二箇所の土坑群が対応すると考えられており、権現原貝塚は、一次葬から二次葬までのプロセスや埋葬された集団の血縁関係が復元された極めて貴重な事例といえるでしょう。一連のプロセスの中で、人骨集積行為は、重要な役割を担っていたと思われ、「新しく集落を開設するときに、異なる血縁関係者を含む集団が複数集合し、至近距離において共同生活をはじめたときに生じる社会的な緊張を解消するための手段として執り行われた葬送儀礼」と評価されています(山田2008)。

茨城県取手市中妻^{なかづま}貝塚では、後期前半頃につくられた直径2m程の土坑から、成人男性約40個体、女性20個体、年齢不明及び幼児から青年期までの人骨約45個体の計105個体が発見されています。多数の人骨は、軟部がほとんど腐食した人骨を一時期に再葬したものと考えられており、再葬行為を伴う葬送儀礼が存在していたようです。

再葬されていた人骨の血縁関係については、105個体の内、49個体のDNA分析が試みられています。29個体でその抽出に成功しており、同じハプロタイプ(DNAの塩基配列のタイプ)の人が半数以上いる一方、異なるハプロタイプの人も含まれているようです。再葬された人々にはクランのような集団の関与(高橋2004)、もしくは、小規模な人骨集積の場合は世帯としての系譜を同じくする人々を想定することが可能であり、このような集団のもつ共有の系譜を維持・再生産

するための葬送儀礼として、中妻貝塚の再葬行為は用意されたものと思われます。権現原貝塚では、再葬行為に二つの集団の統合原理表象の役割が認められましたが、それとは異なる側面の役割を中妻貝塚では確認することができるようです。

4. 動物骨とまつり

動物儀礼を伴うまつりの跡の古い段階の確認例としては、千葉県船橋市の取掛^{とりかけにし}西貝塚があります。ここでは、早期前半の竪穴住居跡の窪地内から見つかった貝層直下から、イノシシの頭骨 12 個とシカの頭骨が 2 体分出土しています。頭骨以外に四肢骨等も見つかっていますが、頭骨から予想される個体数に比べ、出土量は少なく、周囲には火を焚いた跡も認められることから、動物儀礼に伴う痕跡であることが推測されています。

この他、前期の例としては、北海道釧路市^{ひがしくしろ}東釧路貝塚で、イルカ類の頭骨が意図的に配置された例、晩期では、静岡県伊東市^{いとがわ}の井戸川遺跡でイノシシ・シカ・イルカの頭骨が環状に配置された例や山梨県北杜市^{きんせい}金生遺跡で見つかった土坑内から、イノシシの幼若獣の焼けた下顎骨が 100 個体以上出土している例等があります。

後期の関東地方南部では、西ヶ原貝塚の他、千葉県市原市^{さいひろ}西広貝塚等で動物儀礼の跡と思われる例が確認されています。西広貝塚では、竪穴住居の跡地である窪地に後期前葉に形成された貝層が堆積しており、床面直上に堆積する貝層からはイノシシの頭骨が正位で置かれたような状態で見つかっています。周囲の同一面からは磨石やハマグリ・オオノガイの二枚貝類とアワビ類の破片が出土しており、これらには、赤色顔料が付着していました。竪穴住居廃絶後何らかの儀礼的行為が行われた可能性があります。

5. 後期縄文ムラにおけるまつりの一様相

貝塚から特徴的に出土する人骨や動物骨などを手掛かりに、ムラにおけるまつりを垣間見ましたが、墓地に関わるまつりとしては、世帯等に関わる人々が主体となって経営している個別墓単位の祖先祭祀の可能性および再葬を伴う葬送行為について紹介しました。前者については、墓地の占地場所が、ムラの中の共有の場ではなく、住居のまとまり等に対応した個別の場が墓地単位の前提となっており、このような様相は、西ヶ原貝塚や東関東で認めることができます。

後者については、再葬を伴う葬送儀礼において、権現原貝塚と中妻貝塚の例を上げ、葬送儀礼に見られる役割の二側面を指摘しました。

動物儀礼を行ったと思われる遺跡例は、先述したように全国的に見ても、それほど多くはありません。ただ、西ヶ原貝塚におけるイノシシの下顎骨埋納例や男性器を模した骨角器を意図的に配置した例を見る限り、南関東地方南部の後期において、イノシシやシカを対象とした動物儀礼が存在していた可能性は高いと思われます。また、後期中葉以降、西ヶ原貝塚では、イノシシとシカの出土量が主体を占めるようになりますが、イノシシやシカの骨が貝層直下に面的に出土しており、貝層中すなわち、廃棄に伴う出土例が少ないという事実をふまえると、これらの獣骨が何らかの場に伴うものである可能性があります。

このような場が、まつりに伴うものであるかどうかは、今後の検討を要しますが、イノシシ・シカの出土割合偏重の背景を考察する上での一視点として、儀礼的側面も考慮に入れておく必要があるでしょう。

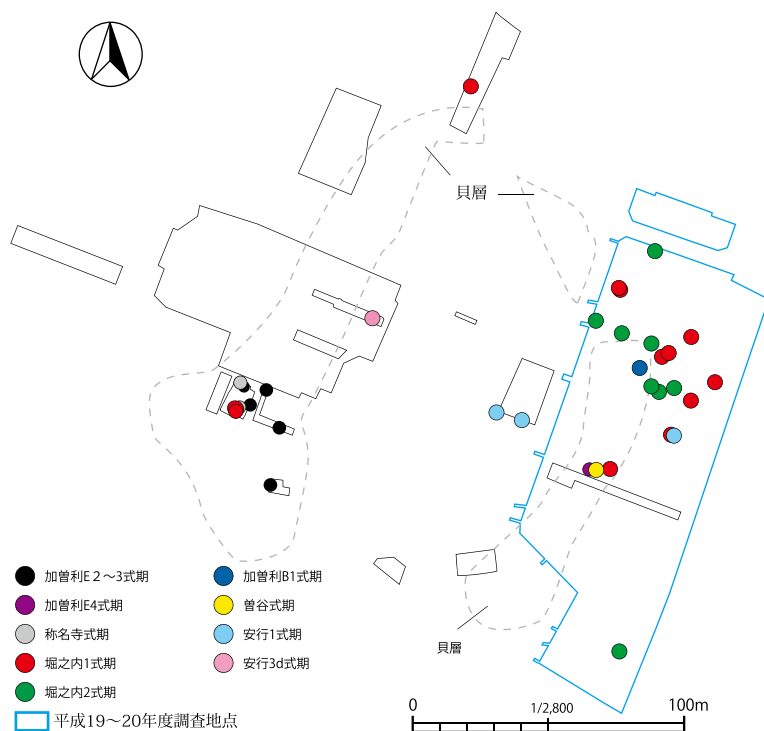
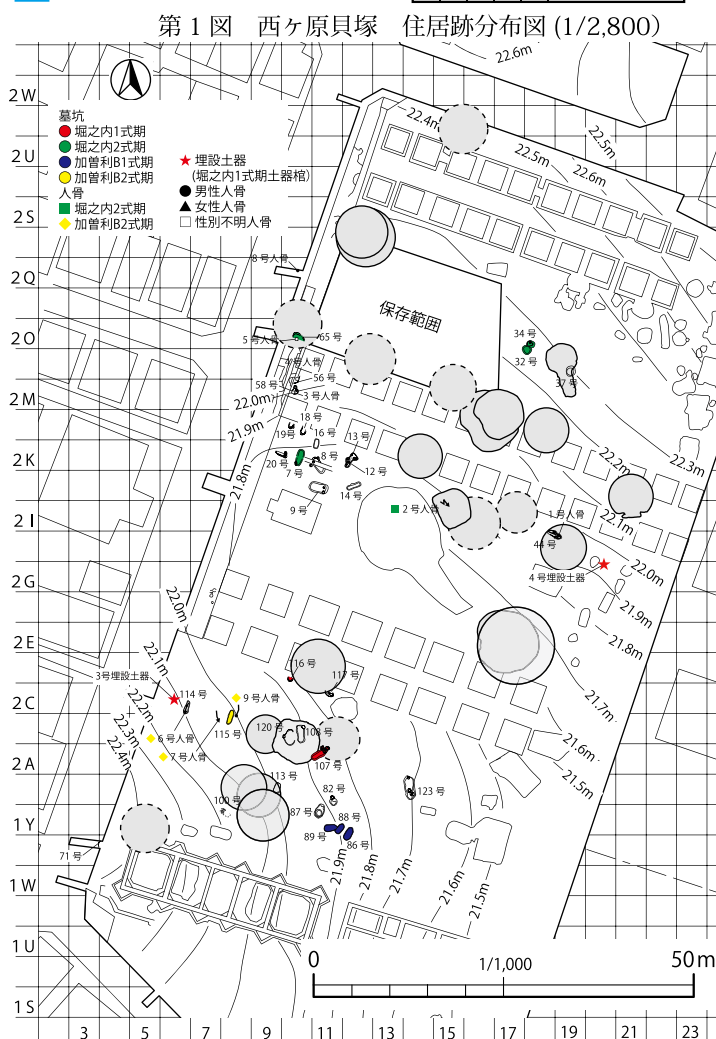


写真1 住居跡(堀之内1式期)



写真2 柄鏡形住居跡(堀之内1式期)



第2図 西ヶ原貝塚 平成19~20年度調査地点 墓分布図(1/1,000)



写真3 出土した堀之内2式土器



写真4 出土人骨(堀之内2式期)



写真5 出土人骨(加曾利B2式期)



写真6 西ヶ原貝塚 後期中葉～後葉の貝層 (23.29.43 号)



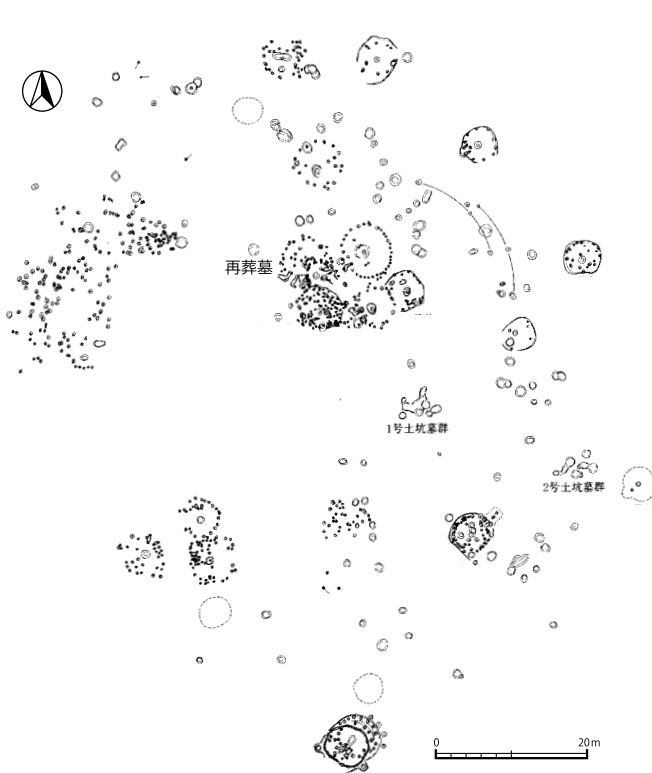
写真8 西ヶ原貝塚 イノシシの下顎骨が出土した土坑 (122 号)



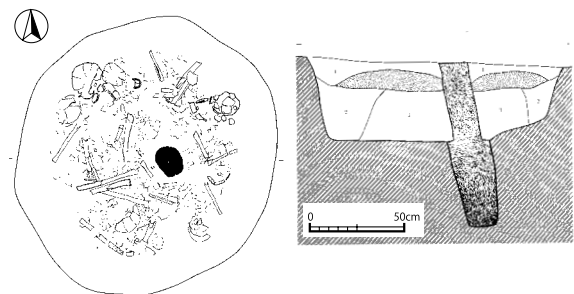
写真7 写真6の貝層直下から出土した骨角製品



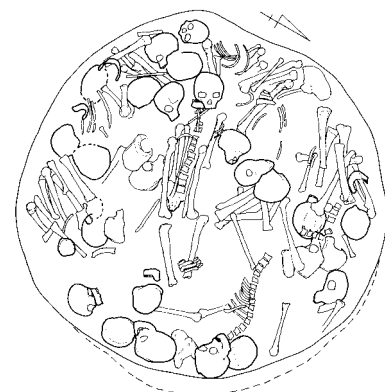
写真9 写真8の貝層直下から出土したイノシシの下顎骨



第3図 権現原貝塚 遺構配置図 (1/1,000)



第4図 権現原貝塚 再葬墓 (1/40)



第5図 中妻貝塚 再葬墓 (約 1/40)

縄文後晩期の時代像と地域社会

明治大学文学部教授 阿 部 芳 郎

1 縄文後晩期という時代

「縄文文化は後期以降それ自身の生産力の限界によって発展性を失い、停滞的な社会を営んでいた・・・中略・・・これにピリオドをうたせたのは、大陸よりあらたな水稻耕作の技術を伴って波及した金属文化であった」(坪井 1962)。

「関東地方の全縄文時代を通じて、遺跡数の最も少ないのがこの晩期の時期であることは、端的に生活の行き詰まりを物語る」(岡本 1965)。

学史的な観点から縄文後晩期の説明を紐解くと、坪井清足や岡本勇のように社会の発展段階として時間的推移を評価し、狩猟採集社会から稲作農耕社会へ段階的に移行するという図式が今日でも強い影響力をもっている。

縄文文化の盛衰はこれまで遺跡数や遺物の造形性・祭祀的色彩、さらには環境の変化などの諸要因から検討されてきたが、近年ではこれに加え気候寒冷化などが引き金になり狩猟採集社会が停滞したと考えられている。

2 「竪穴住居中心史観」の展開

こうした言説と関連する事象の1つとして後期中葉以降における遺跡数(第1図)と竪穴住居址の検出数の激減がある。これを額面通りにとらえれば、文化の停滞的な状況を反映した現象として理解できる。

一方、関東地方東部から北関東地方において後期から晩期の遺跡が群集する地域があり、これらの遺跡を発掘すると、膨大な量の遺物が出土する反面、竪穴住居などの生活遺構の検出がきわめて乏しいことは古くから指摘されてきた。千葉県松戸市貝ノ花貝塚は比較的初期の集落遺跡の広域調

査例であるが、「本貝塚が中期末から晩期まで殆ど連続して構成されたものであることは、そこから出土した膨大な量の土器の精密な研究の結果判明した」、住居は「中期後半から後期前半のものが圧倒的に多く、後期中葉に事例をみず、後期後半から晩期前葉に若干数が認められた。この事実が集落戸数、人口量の増減を示すものではないことは、膨大な土器、石器の量の時期による比率がむしろ逆であり、結局住居構造の相違によってその形跡の把握しえない事情を反映しているのである」(八幡 1973)と報告されている。

これらの認識は、文化の盛衰を示すとされる遺跡数や住居数の増減と深いかわりをもつ。

3 「1遺跡中心主義」の評価伝統

栃木県寺野東遺跡における「環状盛土遺構」は報告書刊行以前の段階ですでに遺跡の性格が論じられ、以後の性格論の下地を形成した。その中で勅使河原彰は「環状盛土遺構」での火の祭りと川岸の木組みの遺構での水の祭りという、2つの祭りがセットとなって定期的に行われていたに違いない。・・・中略・・・寺野東遺跡のハレの施設は、村落の構成員という氏族という枠組みをこえた、もっと広範囲な部族が結集する際の祭祀センターと想定してほぼ間違いない」(勅使河原 1995)と評価した。こうした言説は、縄文時代の発展段階論を下敷きにした解釈であるとともに、特定の一遺跡のなかで縄文社会の特質を論じようとした特徴がある。遺跡と遺跡をつなぐ関係を想定するものの、具体的な分析として遺跡間の関係の説明がないのは、特定遺跡を過大に評価する1遺跡中心主義的な言説の特徴である。

4 後晩期の時代像をどう描くか

以上の学史的な認識と現状における後晩期遺跡の調査成果には、無視し得ない矛盾点がある。

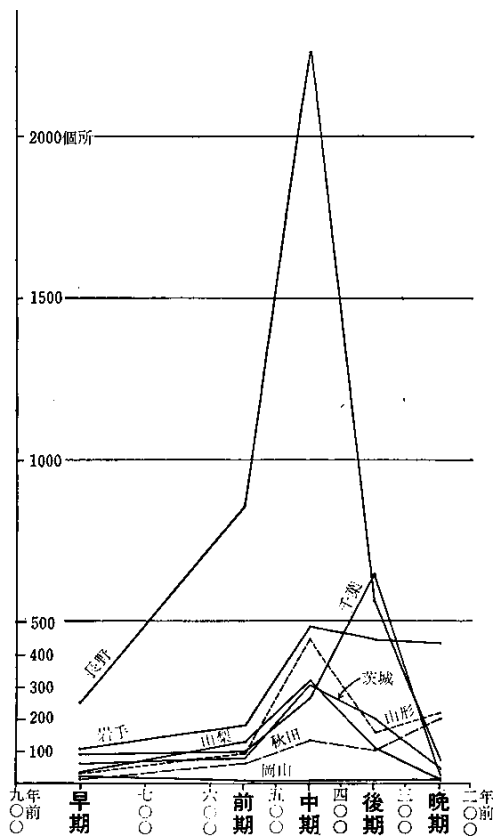
その第1点は居住活動の認識を竪穴住居だけに置いてきたことによって生じる集落遺跡の質と量に関する評価。

第2点として、これらの遺跡形成期間が停滞期とされるにも関わらず10数型式におよぶ土器型式の連続性によって示されるように長期的継続性をもつことである。さらに第3点として後期中葉以降の遺跡が群集する地域が、関東地方北東部に偏在化することである。これは中期後葉の集落遺跡の分布や密度とは異なる点であり、中期と後期中葉以降の社会を遺跡数や遺跡の分布状況か

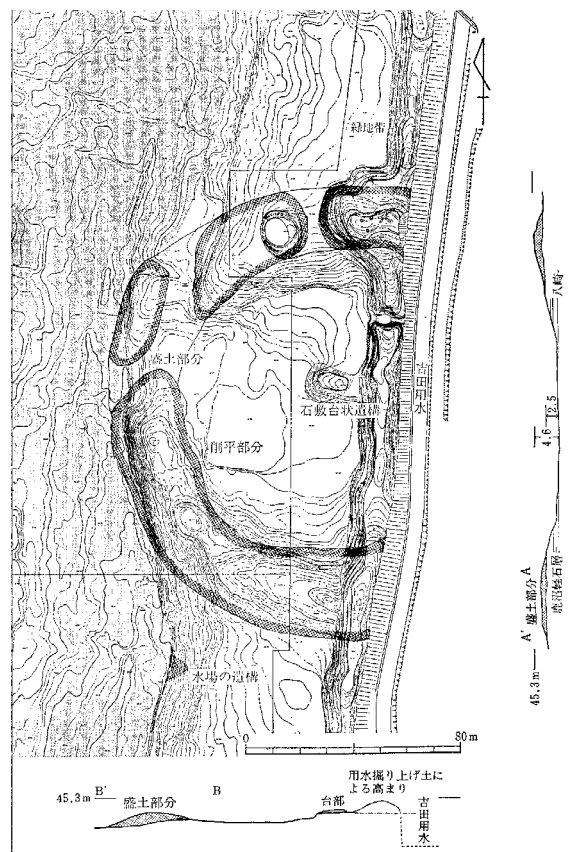
ら同列に考えることはできない。

筆者は寺野東遺跡が発見された比較的初期の段階に環状盛土遺構の性格について、それが長期間における居住活動の累積の結果である点を指摘した(阿部 1996)が、その見解は現時点においても変更の余地はない。

今後の重要な課題は、後晩期遺跡における居住痕跡を解明するための調査技術と分析手法を開発と生業や祭祀にかかわる個別的な分析を統合して研究する必要がある。遺跡が群集する地域全体がどのような相互関係を維持し、地域社会を構成しているのかということを具体的な遺跡間関係として説明することである。



第1図 縄文時代遺跡数の増減
(春成秀爾 1979「縄文時代の終焉」『歴史公論』第5巻2号に加筆)



第2図 栃木県寺野東遺跡の環状盛土遺構
(栃木県教育委員会 1993「縄文時代の環状盛土遺構」『季刊考古学』第46号に加筆)

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2012『立原小路遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 397 集
- 阿部友寿・小川岳人 2012『仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡』かながわ考古学財団調査報告 279
- 阿部芳郎 1996「縄文のムラと「環状盛土遺構」」歴史手帖第 24 巻 8 号
- 天野賢一・池田 治 2002『川尻中村遺跡』かながわ考古学財団調査報告 133
- 新屋雅明 1997『石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 182 集
- 新屋雅明 1984「泥炭層形成期の遺構と遺物」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 人工遺物 総括編』埼玉県教育委員会
- 新屋雅明 1988『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 74 集
- 新屋雅明ほか 2007『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 339 集
- 新屋雅明ほか 2013『大木戸遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 405 集
- 安藤文一 1998「南足柄市五反畑遺跡」第 22 回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨
- 石井 寛 1994「縄文時代後期集落の構成に関する一試論—関東西部を中心に—」縄文時代第 5 号
- 石井寛 1996「縄文中期最終末期以降の集落と住居址」パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』資料集 かながわ考古資料刊行会
- 石坂茂ほか 2001「群馬県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 石坂茂 2007「北関東の諸遺跡」『季刊考古学』101
- 石坂俊郎ほか 2004『後谷遺跡』桶川市教育委員会
- 石塚和則 1986『将監塚 - 縄文時代 - 』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 63 集
- 井辺一徳・小林晴生・相良英樹『はじめ沢下遺跡』かながわ考古学財団調査報告 236
- 植木弘 1988『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会報告 5
- 上野真由美 2012『新田東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 390 集
- 太田賢一 1998『吉見町三ノ耕地遺跡の調査』『第 31 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- 岡本勇 1955「日本考古学の発達・縄文文化」『日本考古学講座』2 河出書房
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1996「平成 7 年度かながわの遺跡展 謎の敷石住居」
- 神奈川県立埋蔵文化財センター・(財)かながわ考古学財団 1997 パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』記録集
- 金箱文夫ほか 1989『赤山』川口市遺跡調査会
- 金子直行 1997『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 187 集
- 黒坂禎二 1989『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 80 集
- 黒坂禎二 2008『牛原／御新田／番匠・下道／横沼新田／北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 353 集
- 小杉秀幸 2013『本上遺跡』伊奈町埋蔵文化財調査報告書 第 2 集
- 小林茂ほか 1981『秩父・駒形遺跡' 78』駒形遺跡発掘調査会
- 小林茂ほか 1988『秩父・大背戸遺跡' 63』埼玉県秩父郡皆野町教育委員会
- 小林茂 1995『秩父合角ダム水没地域』合角ダム水没地域総合調査会
- 坂口隆 2003『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書 5 (株)アム・プロモーション
- 佐々木由香ほか 2001「川口市石神貝塚(第 14 次)の調査」『第 34 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- 庄野靖寿ほか 1983『岩槻市史 考古編』岩槻市
- 鈴木保彦 1977『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 14
- 鈴木保彦 1980「関東・中部を中心とする配石墓の研究」神奈川考古第 8 号
- 鈴木秀雄ほか 1996『坂東山／坂東山西／後 B』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 166 集
- 高橋一夫ほか 2007『春日部市庄和町史編さん資料(14)』春日部市教育委員会

高橋龍三郎 2004『縄文文化研究の最前線』早稲田大学
 坪井清足 1962「縄文文化論」『日本歴史』1 岩波書店
 勅使河原彰 1995「ケとハレの社会交流」『縄文人の時代』新泉社
 富田和夫ほか 1989『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第76集
 西井幸雄ほか 2008『大木戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第355集
 西澤 明 2012「縄文人と死、そして墓」『日本葬制史』吉川弘文館
 西澤 明 2012「縄文ムラと貝塚―北区西ヶ原貝塚の事例から―」『研究論集XXVI』東京都埋蔵文化財センター
 西本豊弘 1995「縄文人の動物観うかがえる海獣主体の儀礼」『最新縄文学の世界』朝日新聞社
 野中智夫 1993『丸山台遺跡Ⅱ』和光市埋蔵文化財調査報告書第6集
 橋本勉 1990『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第93集
 服部実喜・小川岳人 1997『青山開戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告 29
 早川智明 1984「遺跡の立地と環境」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 人工遺物 総括編』埼玉県教育委員会
 細田勝ほか 1989『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第76集
 細田勝ほか 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集
 堀口万吉 1976「Ⅱ 埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史 別編3』埼玉県
 三瓶裕司・大塚健一 2013『子易・大坪遺跡 子易・町屋裏遺跡』かながわ考古学財団調査報告 292
 宮井英一 1989『古井戸 - 縄文時代 - 』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集
 宮崎朝雄ほか 1986「縄文時代」『川口市史 考古編』川口市
 村田章人 1997『原／谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第179集
 安田喜憲 1980『環境考古学事始』NHKブックス
 柳戸信吾ほか 1999『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能市教育委員会
 山下晋司 1975「獣・分与・共同体」社会人類学年報
 山下晋司 1994「勲功祭宴」『文化人類学辞典』
 山田尚友 2012「さいたま市南鴻沼遺跡の調査」『第45回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
 山田康弘 2008『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
 山本暉久 1976「敷石住居出現の持つ意味」(上・下) 古代文化 28 巻2号・3号
 山本暉久 1980「中期終末期の集落」神奈川考古第8号
 山本暉久 2010『柄鏡形〈敷石〉住居と縄文社会』六一書房
 八幡一郎 1973『貝ノ花貝塚』松戸市教育委員会
 横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター『縄文文化円熟―華蔵台遺跡と後・晩期社会―』
 渡辺 新 2008「集団構成―千葉県権現原貝塚の事例―」『縄文時代の考古学 10 人と社会』同成社
 渡辺清志 2000『浜平岩陰／入波沢西／入波沢東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第243集
 渡辺清志 2001「埼玉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
 渡辺清志 2005『雅楽谷遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第307集

平成25年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー

縄文後晩期～ムラとまつりの景色～

平成25年 月 日発行

編集・発行 / 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団／埼玉県文化財収蔵施設

〒 369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目 4 番地 1

TEL：0493-39-3955（代） FAX：0493-39-3579

ホームページ：http://saimaibun.or.jp/

交通：JR 高崎線熊谷駅南口から

熊谷市ゆうゆうバス「ひまわり号」

船木台大境公園前・徒歩 5 分

JR 高崎線熊谷駅北口から

国際十王バス東松山駅行

青山下車・徒歩 25 分

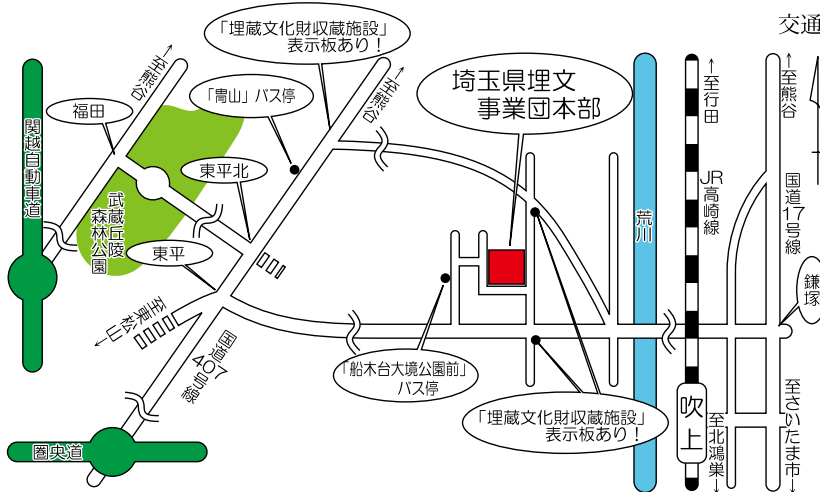
東部東上線東松山駅北口から

国際十王バス熊谷駅行

青山下車・徒歩 25 分

JR 吹上駅から車 10 分

関越自動車道東松山 I・C から車 15 分



公益財団法人東京都スポーツ文化財団
／東京都埋蔵文化財センター

〒 206-0033

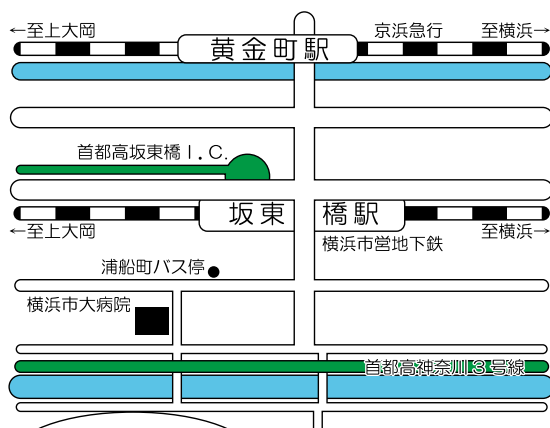
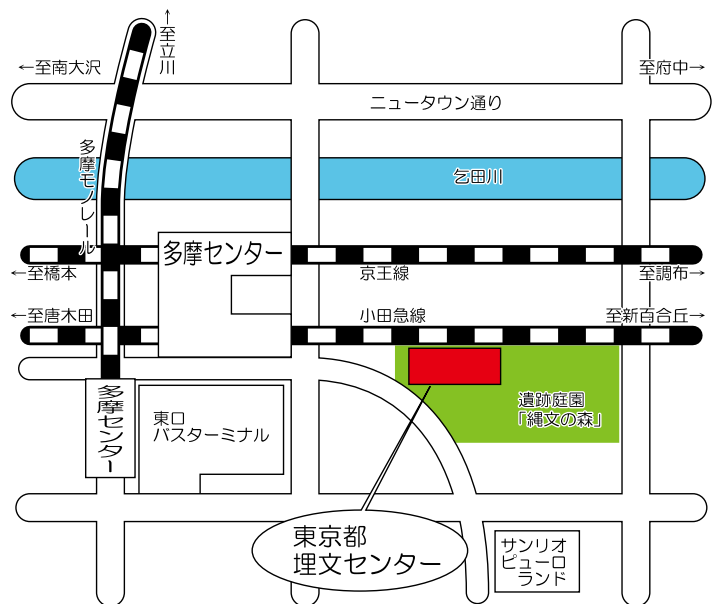
東京都多摩市落合一丁目 14 番 2

TEL：042-373-5296 FAX：042-374-2161

（経営管理課 広報企画係）

ホームページ：http://www.tef.or.jp/maibun/

交通：京王・小田急多摩センター駅 徒歩 5 分



公益財団法人かながわ考古学財団

〒 232-0033

神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1

TEL：045-252-8689

FAX：045-261-8162

交通：京浜急行電鉄 黄金町駅下車 徒歩 13 分

横浜市営地下鉄 阪東橋駅下車 徒歩 7 分

横浜市営バス 浦船町停留所下車 徒歩 5 分

